

大内源太右衛門

仙台市博物館 市史編さん室長 菅野正道



仙台の街路樹

五月の連休が明けると、青葉通や定禅寺通は緑の空気で満たされます。戦後に街路樹として植えられたケヤキが芽生える五月は、仙台の一番美しい季節ではないでしょうか。

ところで、仙台の市街地に街路樹が植えられたのは何時からでしょうか？ 明治十八(一八八五)年に大橋と仙台城大手門を結ぶ道の両側に松・杉・桜の若木数百本が植えられたという記録がありますが、この道の両側は、民家や商店などがあつたわけでもなく、「街路樹」というには少々抵抗を感じます。

真正正銘の「街路樹」となると、明治二十四年に南町通に桜と柳が植えられたというのが最初ようです。南町通は、明治二十年に鉄道が開通した後に、仙台駅に通じる道として拡幅が行われました。通りに沿って商店や会社、劇場などが次々と設立され、仙台の新しいメインストリートとなりました。柳や桜の街路樹は、それに花を添えたと言っても良いかもしれません。

時代を先取り

この南町通の街路樹、実は公的事業ではなく、実業家の寄付によるものでした。その主は、大町の呉服商・八代目大内源太右衛門です。

八代目源太右衛門は、弘化四(一八四七)年、宮城郡原町に生まれ、大町で古着を商う大内屋の養子となりました。ところが、源太

右衛門が二三歳を迎えた時、戊辰戦争が勃発。大内屋は明治維新の激動を上手く乗り切れなかったこともあり、経営が厳しくなりました。

品物の仕入れ資金にも事欠く中、店の建て直しを決意した源太右衛門は、自らの羽織を売って古着を仕入れて山形へ行商に行き、売却益で古着を買い山形で行商することを繰り返しました。当時、仙台では生活に困った士族が多く、古着を安価に仕入れることができただけです。こうした源太右衛門の手腕によって、大内屋は立ち直り、大町と東一番丁の角に呉服店を開くほどまでになったのです。

源太右衛門の商才は、店舗を拡大した後も、とどまりませんでした。新しい織り方の商品を生み出し、レース織りを導入し、商品の仕入れの便や顧客のニーズに対応するために東京の商店と提携した会社を設立しようとするなど、新しい試みを次々と打ち出しました。

また、「偶像(人形)」に「新趣向」の服を着せたものを幾つも店の前に飾ったといいますが、これはマネキンに最新ファッションを着せる現在のディスプレイと同じ手法でした。ほかに布の端切れを詰めた「楽善袋」を毎週土曜日に売り出したのですが、二十銭(現在の二千〜四千円程度)で、まともに買えばその数十倍以上もする洋服一着が作れるに充分なだけの布が入っていたそうです。仙台で最も早い福袋の事例かもしれません。

このように源太右衛門は、顧客のニーズを考えながら、新しいアイデアを導入すること

今も息づく篤志

に努め、店を仙台有数の商店にしたのでした。このように事業では斬新な手法を展開した源太右衛門でしたが、自身は質素節約を旨とし、信仰心が篤く、数々の慈善事業や文化事業(出版や文芸活動、寺社の保存など)に私財を惜しまず投じた人物でした。

例えば、楽善社という慈善組織の中心的存在となり、同社が主催する若者向けの無料の夜間学校に店の二階を提供しています。また日清・日露戦争の際には出征者の留守家族の生活支援や戦死者の慰霊に心を砕きました。孤児や寡婦などへの支援にも力を注ぎ、とくに明治二十四年に中部地方で発生した濃尾地震の際には二十四人もの孤児を引き取って養育しています。南町通の街路樹は、この孤児の養育を記念して植樹されたものでした。

原町には大源横丁という道があります。住民の交通の便を考えた源太右衛門が作ったもので、道の名はその功績を讃えて付けられたものです。明治四十二年に没した後も、彼の篤志は、今もその道に息づいているのです。



明治二十年頃の大内屋の店舗を描いた版画
(提供:株式会社大内屋)

仙台市史

好評発売中

特別編4 市民生活

明治以降の人々の暮らしを、豊富なカラー図版とともに紹介

◆B5判 620頁 オールカラー ◆定価6000円(本体5714円)

お求め先 県内主要書店・仙台市博物館/株式会社宮城教育供給所 TEL.022-235-7181 FAX.022-235-7183
お問い合わせ先 仙台市博物館市史編さん室 〒980-0862 仙台市青葉区川内 26 番地 TEL.022-225-3074



戦前の大町 藤崎デパート(写真右)の向かいの建物は、仙台におけるテナント・ビルのさきがけとなった大内ビルアーケード(昭和3年建築)